**シャクヤクまとめ（島根大学名誉教授　細木高志）**

1. **シャクヤクはボタン科のPaeonia 属に入る草本で亜種含め約40種あり、ヨーロッパから東アジアに分布するPaeon節と北米に一部分布するOnaepia節に分かれ、前者はさらに3亜節（Albiflora、Foliolatae、Paeoniaグループ）に分けられる。なお低木のボタンはMoutan 節に属す。**
2. **園芸品種を最も多く出した重要なシャクヤクの原種（*Paeonia lactiflora*）は中国東北部からシベリアに分布し、次に重要なオランダシャクヤク、ペレグリナ、マスカラ、細葉シャクヤクの原種はヨーロッパから小アジア・コ－カサスのいずれかに分布し、さらに*P.anomala*は中央アジア、*P.emodii*はヒマラヤ、*P.veitchii*は中国西部、紅花山芍薬（*P.obovata*）は中国・日本、山芍薬*(P.japonica*)は日本にのみ分布する。**
3. **西洋ではシャクヤクは紀元前から薬用として利用され、1世紀の書物の「De Materia medica」に書かれ、以後版画によく出てくる。**
4. **観賞用としては15世紀初に「楽園の小庭園」の絵の中にオランダシャクヤクの一重が描かれている。15世紀後半にはM.Shongauerが、16世紀にはA.Durerが一重を描いている。八重のオランダシャクヤクは17世紀初頭にBrueghelが初めて描き、以後17-18世紀のオランダのフランドル派の画家により垂れ下がり重弁の花が多数描かれた。既に15世紀にはオランダシャクヤク八重品種'Albicans'などが出現していたとされる。**
5. **1805年に英国のJ.Banksが八重咲き中国品種（*P.lactiflora*）‘Fragrans’などをヨーロッパに導入し本格的な洋芍の育種が始まり、八重大輪白色品種の名花‘Festiva maxima’などが生まれた。アメリカでも19世紀前半から 育種始まり、20世紀にはA.P.Saoudersらにより多数の種間交雑品種が作出された。またAmerica Peony Societyが1904年に設立され栽培・育種の指導や品種登録が行われている。**
6. **シャクヤクの絵は19世紀以後、八重のオランダシャクヤクから八重の*P.lactiflora*品種に置き換わり、ピサロ、ルノワ－ル、バ－ジル、マネ、ゴッホ、バラマンクなどが描いている。**
7. **中国におけるシャクヤクの歴史は古く紀元前後の「神農本草経」に薬草の中品と書かれ、「山海経」にも現れ、紀元前頃から薬として利用された。**
8. **西周時代から春秋戦国中期の鄭（紀元前8-4世紀に存在）には、シャクヤクが男の女への贈答花として利用されたことが「詩経」に詠まれている。**
9. **晋代（3-5世紀）には宮中の庭園植えされて観賞の対象となり詩に詠まれた。以上からシャクヤクの観賞の歴史はボタンより早い。また晋代には、シャクヤク（草芍薬）は木芍薬（牡丹）と区別された。**
10. **隋代・唐代にはシャクヤクが観賞植物として確立しボタンに次ぎ花の宰相と呼ばれた。**
11. **北宋代（10-12世紀）には、王観が「揚州芍薬譜」を書き栽培法や花型を書いた。また淡黄色品種もできた。揚州（江蘇省）がシャクヤク栽培の中心であり、八重が一重より尊ばれた。**
12. **明代（14-17世紀）の李時珍の「本草綱目」に芍薬・牡丹の説明が書かれた。また「群芳譜」には芍藥の栽培法が書かれた。**

**⑬清代（17-20世紀)には画家の惲寿平が五色芍薬図描き、白、淡黄、桃、薄赤、赤色の大**

**輪八重があり盛り上がった手毬咲きあった。秘伝花鏡には88種が掲載された。中**

**国八重品種は1805年からヨーロッパに輸出され洋芍薬品種群の育種の親となった。**

**現在の中国シャクヤクには洋シャクと同様に一重、八重、翁咲き、冠咲き、手毬咲きに**

**近い品種が多数見られる。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　⑭日本のシャクヤクは薬草として中国から平安時代には入っていて、10世紀の「本草和名」**

**に記されている。観賞用には11世紀に漢詩に詠まれ、室町時代15世紀の仙伝抄にも現れ、安土桃山時代16世紀には長谷川等伯が白花八重のシャクヤク絵描いている。**

**⑮江戸時代初期には花の翁咲きが板戸絵に見られるし、「花壇綱目」や「花壇地錦抄」に**

**品種の解説が書かれ、芍薬の花型指南には雄しべの形態変化が図示された。**

**⑯江戸中期に肥後六花の一つにシャクヤクが選ばれ、雄しべが幅広になり黄金に輝く金しべ(金ずい)咲きも育成された。この時代に金しべ咲き、翁咲き、冠咲きなどの花型が完成した。一方で茶花に見られるシンプルな一重咲き和シャク品種も発達した。**

**⑰江戸時代の芍薬画は長谷川等林、葛飾北斎、伊藤若冲、小野田直武など多数の画家により描かれ一重、金しべ咲き、八重や翁咲きなどの花型が見られる。**

**⑱明治時代には「芍薬花譜」や「牡丹芍薬培養法」などに品種の絵図、解説、栽培方法が**

**詳しく書かれた。**

**⑲神奈川農事試験場の宮沢文吾は明治末から昭和初めにかけて、西洋芍薬バラ咲き品種の血を日本品種に入れて700余の新品種を昭和7年に発表した。**

**⑳伊藤東一・押田成夫は黄色のボタン品種と白色のシャクヤク品種を交雑して昭和33年に**

**世界初の鮮黄色のシャクヤク雑種品種（ボタンとの節間雑種）‘オリエンタルゴールド’を育成した。この交雑方式は伊藤式と呼ばれ、欧米で応用されて黄色のみならず赤色含む多数のボタン・シャクヤク雑種品種ができつつある。**